

空間情報社会の実現を目指して

9/27 CSIS Days 2005

2005年9月27・28日の両日、東京大学本郷キャンパス山上会館（東京都文京区）において、東京大学空間情報科学研究センター（CSIS）主催による「東京大学空間情報科学研究センター 第8回年次シンポジウム—CSIS DAYS 2005—」が開催された。

CSISでは共同研究成果の公表と産官学の連携の強化を促進する目的で毎年9月に年次シンポジウムを開いており、今回は8回目にあたる。昨年までは1日のみの開催だったが今年から2日間と拡大され、初日は4つの講演、2日目は最新の研究成果として実に43件もの発表が行われた。

Web世界を変えていく“Google Earth”

初日は午前の招待講演セッションと午後の「空間情報社会研究フォーラム」セッションの二本立ての構成。まず開会にあたって、4月から新しく空間情報科学研究センター長に就任した柴崎亮介教授が挨拶、CSISが全国共同利用施設としてスタートしたこと、研究発表会を公募にしたところ予想以上の申し込みがあったことを報告した。招待講演では今年業界の話題をさらった「Google Earth」の中心的開発者であるMichael T. Jones氏（Google Inc., Keyhole CTO）が、「“Google Earth: Challenges of Geospatial Visualization”」と題して実際にGoogle Earthを使って宇宙より俯瞰する地球から大地を駆ける動物までが見える画像まで一気に拡大したり、位置を関連づけることで膨大な情報が整理されていく様子などを披露、Web of Places、Imagery/Map、Fun to useといったコンセプトによって、これからのブラウジングは再定義されていくだろうと語った。続いてオハイオ州立大学地理学科名誉教授のDuane F. Marble氏が「Some Remarks on the Status of Reserch in Geographic Infomation Science and Technology」と題して講演を行った。

空間情報社会が目指すもの

午後の特別講演ではまず柴崎氏が、人・モノ・事象な



どのあらゆる情報は位置を結びつけることで識別できるようになれば、より知の構造化や新たな理解が進み、それこそが空間情報社会のもたらす世界となると語った。また、空間情報社会の基盤形成のため「空間情報社会研究フォーラム」の設立を宣言し、各方面からの参加を呼びかけた。続く基調講演では、野村総合研究所理事長の村上輝康氏が「ユビキタスネットワーク化と空間情報社会」と題し、行政や世界各国におけるユビキタスネットワークへの取り組みや、ユビキタスパラダイムの浸透状況を紹介した。

その後「空間情報社会研究フォーラム」の設立総会が行われ、GIS学会副会長の村山祐司氏と国土地理院参事官の秋山実氏が挨拶。村山氏は空間情報社会を生きることはGIS力を付けることであり、それは適切な空間的意思決定を可能とする力だと述べた。また秋山氏は21世紀に日本が直面する課題を克服するために国土のインテリジェント化が必要で、ユニバーサルな地理情報の提供を目指していくと語った。

参加者全員が議論

2日目はCSISおよび全国の空間情報科学に関する研究についての発表が行われた。発表はテーマごとに「地形学と水文学への応用（9件）」「都市環境研究（12件）」「GISと教育（5件）」「空間情報サービス（8件）」「空間ITと要素技術開発（9件）」の計43件。全ての発表は数分間の口頭発表ののちにポスター会場で再度展示され、参加者がポスターを前にしてじっくりと討論できるよう配慮された。実際にパソコンを使ってデモしたり参加者同士で議論したりと、ただ発表を聞いて終わるだけではない、非常に充実した2日間となった。